

令和 2 年 5 月 10 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02375

研究課題名(和文)1950年代日米美術の「人物交流」プログラムの研究 米国財団・国務省を中心に

研究課題名(英文) Study of the Japan-U.S. Exchange of Persons program in art in the 1950s: focusing on the sponsors-American private foundations and the U. S. Department of States

研究代表者

桑原 規子 (KUWAHARA, Noriko)

聖徳大学・文学部・教授

研究者番号：90364976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1950年代にロックフェラー財団や国務省の「人物交流」プログラムで渡米した日本人美術家や美術研究者がどのような基準で選ばれ、いかなる活動をアメリカで行ったのか、また彼らが戦後日本の美術界にいかなる影響を齎したのかを検証した。その結果、選考の背景に占領期の在日米国人との人的ネットワークと彼らの日本美術に対する評価が存在したことが明らかとなった。また、サンフランシスコ講和条約の発効以後、日本の親米化を進める文化政策のひとつとして推進された「人物交流」プログラムによって、日米の美術交流が盛んとなり、日本美術界の国際化が進展、それが1960年代へと広がりを持つものであることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、戦後日本美術の見直しが盛んに行われているが、1950年代に渡米した美術家や美術研究者の多くがアメリカから資金援助を得ていたこと、帰国後彼らが日本美術の国際化に影響を与えた点についてはほとんど検証されていない。本研究課題では特に戦後日本美術界において重要な役割を果たした美術家や美術史家が1950年代に米国側の資金援助で渡米していた事実を重視し、戦後日本美術史が彼らによってどのように構築されていったのかを検証した。それによって、個別の作品・作家研究からだけでは見えてこない、戦後日本美術史の新たな側面を明らかにすることができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the Japanese artists and art scholars who traveled to the United States in the 1950s under the Exchange of Persons program sponsored by the U.S. Department of States and the Rockefeller Foundation: how they were selected, what they did in the US, and how their activities and experiences impacted the postwar Japanese art. Our extensive research established that a network of Americans who lived in Japan during the Occupation and their estimation of Japanese art played a major part in the selection. The study also found that the Exchange of Persons program, which was part of the 'cultural diplomacy' in the post-San Francisco Peace Treaty era, significantly accelerated the globalization of Japanese art, leading to its major expansion in the 1960s.

研究分野：日本美術史

キーワード：日米美術 人物交流 1950年代 ロックフェラー財団 国務省 冷戦

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、戦後の日米交流については外交面からだけでなく文化交流の視点から日米関係を問い直すとする研究が急速に進展していた(松田武『対米依存の起源 アメリカのソフト・パワー』2015、藤田文子『アメリカ文化外交と日本 冷戦期の文化と人の交流』2015)。また、美術分野においても冷戦下におけるアメリカでの日本美術紹介に焦点を当てた論稿が発表され、戦後日米美術に関する研究が活発化しつつあった(池上裕子「ポスト・コンフリクトの日米美術交流 ジョン・D/ロックフェラー3世の役割を中心に」2011、志邨匠子「サンフランシスコ日本古美術展覧会(1951年)と冷戦下の日米文化外交」2013)。しかしながら、それらはいずれも米国で行われた展覧会を研究対象としたもので、日米の美術家の人的交流に主眼が置かれたものではない。

また、戦後日本美術に関する研究は、占領解除後の1950年代の美術に焦点が当てられて研究が進められてきたため、占領期の研究はいまだ十分に進展しておらず、空白となっている部分が多い。そうした中で注目すべき研究として、「占領期の美術と冷戦 日本、ドイツ、アメリカ」(研究代表者五十殿利治、挑戦的萌芽研究2014~2016)が挙げられる。この研究には代表者も研究協力者として参加したが、それとは別に2011年から継続して「在日欧米人ネットワークと戦後日本美術の評価」(基盤研究(C))という視点のもと、占領期から1950年代に日本に滞在した欧米人の中でも特に美術に関係した人物(美術家・美術批評家・コレクターなど)とそのネットワークの調査を通して、在日欧米人が戦後日本の美術に与えた評価とその影響について検証を進めていた。そこで特に注目すべき点は在日アメリカ人のネットワークが単に日本国内での評価に影響を与えていただけでなく、本国アメリカでの日本美術評価にも関わっていた点であった。そしてこの調査研究によって新たに浮上した問いが、1950年代に米国政府あるいは米国民間財団の経済的支援を受けて渡米した日本人美術家や美術研究者の選出にも、在日アメリカ人のネットワークが関与していたのではないかという問題である。

従来の研究においてアメリカが果たした役割は十分に明らかにされてきたとはいえ、戦後日本美術の動向を検証するためには、占領期から占領解除後へと日米の美術交流を連続して辿ることが必要だと考えられる。これが本研究開始当初の背景である。

### 2. 研究の目的

1952年のサンフランシスコ講和条約の発効以後、米国は冷戦下において日米の「人物交流」プログラムを文化政策の一つとして推進した。美術分野においても、1950年代、日本人美術家や美術研究者が国務省やロックフェラー財団などアメリカ側の資金援助を受けて次々と渡米した。帰国後、彼らが日本の美術界において果たした役割は大きく、それは戦後日本美術の進む方向性を決定づけるものであった。そこで、本研究では、渡米作家・美術研究者がいかなる基準(あるいはどのような人的ネットワーク)で選ばれ、渡米中どのような活動を行ったのか、また彼らの活動が戦後日本の美術界にいかなる影響を齎し、それが次の世代にどう繋がったのかを、日米の「人物交流」という視点から明らかにすることを目的とした。

なお、研究の対象とする時代は1950年代を中心とした。その理由は、1964年になると日本人の渡航は自由化され、また東京オリンピック開催により来日するアメリカ人の数も格段と増加し、こうした時代の変化によるものが、国際文化会館やジャパン・ソサエティが関わった「知的交流計画」も1965年に一度中断されている。研究代表者の調査でもアメリカ国務省や民間財団から招聘された美術家や研究者は1950年代に集中している。したがって、調査の対象を1950年代に絞ることによって、戦後日米美術の「人物交流」プログラムの特徴をより鮮明に浮かび上げさせることを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が「在日欧米人ネットワークと戦後日本美術の評価」に関する研究で蓄積した情報・資料を活用し、さらにそのネットワークの調査を日本国内だけでなくアメリカ本国へと広げること前提とした。したがって、研究の方法は海外研究協力者と連携を取りつつ海外調査を行い、国務省や米国財団などの基礎資料の収集、渡米美術関係者の資料調査を行う方法を行った。具体的には以下のような調査研究であった。

(1)日本人美術関係者の渡米を経済的に支援した団体(アメリカ国務省、ロックフェラー財団、アジア財団)の実施した「人物交流」プログラムについて年次報告書等を基に調査し、その実態を明らかにする。

(2)戦後アメリカに招聘された日本人美術家および美術研究者に関して、渡米の経緯、アメリカでの活動や反響、渡米前と帰国後の作品や言説の変化などを検討し、各作家や研究者にとって渡米がいかなる意味を持っていたのかを検証する。

(3)1950年代に渡米した日本人の推薦や選考には、占領期以降日本に住んでいた、あるいは頻りに来日していたアメリカ人(特に美術関係者)が関わっていた可能性が高い。よって、在日アメリカ人のネットワークと日本人美術家、美術研究者との関係を吟味する。

(4)数は少ないが、当時、国務省・米国財団の助成を受けて来日したアメリカ人美術家もいたので、彼らの来日の経緯、日本での活動や反響などを調査し、来日の意義を明らかにする。

(5)(1)~(4)までの調査研究を行った上で、1950年代の「人物交流」プログラムが戦後

日本の美術界に与えた影響を解明する。

海外研究協力者、国内研究協力者とは密に連絡を取りつつ、研究成果は国内の学会および国際的学会で発表、最終年度には国内外から美術史研究者を招いてワークショップを開催、研究の深化を目指した。

#### 4. 研究成果

研究期間中、研究代表者と研究協力者は協働して研究テーマについて調査を行った。その結果得たおもな成果は以下の通りである。

##### (1) 国務省の「人物交流」プログラム (International Visitor Program) について

昭和26年(1951)にサンフランシスコ講和条約が締結され、連合軍による占領が解除されると、日本人美術家の国際展への出品が開始され、日本の美術界も国際化の時代を迎える。それとともに多くの日本人美術家や美術関係者がパリやニューヨークなど海外へ渡った。しかし、1964年に海外渡航が自由化されるまでは誰もが海外へ行ける時代ではなく、渡航費や滞在費など経済上の問題が存在した。

こうした状況下で、美術家や美術関係者が渡米した方法の一つとして挙げられるのが、米国側の「人物交流」プログラムであり、資金援助であった。代表的なものとして国務省による「人物交流」プログラムとジャパン・ソサエティ(後述)による日本人美術家の招聘プログラムが挙げられる。

アメリカンセンターJapanの資料および他の資料調査により判明したのは、現在インターナショナル・ビジター・プログラム(IVP)と呼ばれている国務省の「人物交流」プログラムによって1950年代に渡米した人物として、1956年に斎藤清、脇田和、益田義信、村田良策、1958年に亀倉雄策、金丸重嶺、河北倫明がいたことである。なお、同プログラムではないが、1954年に山田智三郎、1958年に阿部展也が国務省に招聘されていたこともわかった。この中でも特に重要な役割を果たしたのが山田智三郎で、占領期にアメリカ陸軍教育センターArmy Education Centerで「展覧及び講演部長」を務め、日本美術の支援団体サロン・ド・プランタンのアドバイザーとしても働いていた彼は、国務省の招聘する美術関係者の選考に深くかかわっていた。なお、彼が占領期に在日欧米人との間に築いていた幅広いネットワークも、直接間接に国務省の「人物交流」プログラムにも寄与していたものと思われる。

本課題では特に1956年に渡米した斎藤清、脇田和、益田義信に焦点を絞り、彼らが選ばれた理由、滞米中の活動、帰国後の活動などについて比較検討した。国内での調査とともに、3人が訪問したシアトル、ニューヨークで海外調査を行うことにより、ジョージ・蔦川をはじめとする日系アメリカ人美術家が招聘者の受け入れ先として機能していたこと、アーサー・フローリーやフレデリック・オハラなどアメリカの美術家と招聘された日本人美術家との作家交流があったことが判明した。また、益田義信がシンシナティの国際版画展に参加したことが、1957年から始まる東京国際版画ビエンナーレ開催のきっかけとなったことも明らかとなった。三人の巡歴の時期と場所、課された役割に相違はあるものの、彼らの渡米により日米の人物交流が盛んになったこと、日本美術界の国際化が進展したことは確かであり、それは1960年代へと広がりをもつものであった。また、日本人美術家の渡米は日本の親米化を進めるのにも少なからず貢献しており、国務省のプログラムは単に日本人を招聘するだけでなく、帰国後もその同窓生組織とつながり、日米の人的ネットワークを構築しようとするものであったといえる。

##### (2) ジャパン・ソサエティ(ロックフェラー財団)の「人物交流」プログラムについて

1950年代の「人物交流」において、国務省のプログラムと並んで重要なのはロックフェラー財団が資金提供していたジャパン・ソサエティのプログラムである。同財団の招聘で渡米した日本人美術家については、その全体像が見えず、選考の過程や活動の詳細もはっきりしない部分があったが、ニューヨークのロックフェラー・アーカイヴ・センターで調査を行った結果、いくつかの事実が判明した。

まずロックフェラー財団が1950年代に特に力を入れた「人物交流」プログラムが版画部門で、1958年～1960年の3年間に特別プログラムとして3名の版画家(関野準一郎、棟方志功、森泰)を米国に招聘、逆にアメリカ人版画家テオドール・ガストン、アーサー・フローリーの滞日に資金援助を行ったこと、その選考段階で財団が、国務省のプログラムで招聘された斎藤清の意見を聞き、参考にしていたことが分かった。ジャパン・ソサエティは1956年に渡米した斎藤清の米国での成果を高く評価、さらにアメリカの版画関係者の間で日本版画のテクニクに対する強い興味があることを勘案し、版画家の招聘をプログラムの中心に据えたものと考えられる。また1960年以降、版画家の人物交流は双方向的なものへと発展し、アーサー・フローリーは約1年間の滞日中に「日米石版画工房」を設立、日本の美術家や書家に石版画を指導し、石版画の普及に努めた。

さらに、ニューヨークのイサム・ノグチ美術館、内間安せいご遺族、神奈川県立近代美術館、和歌山県立近代美術館所蔵資料の調査を通して、前述の特別プロジェクトとは別に、ロックフェラー財団の援助の下に渡米した吉田遠志(1952年)、石井柏亭(1954年)、北大路魯山人(1954年)、泉茂(1959年)、高橋力雄(1962年)に関する情報を得ることもできた。また、戦中期か

ら占領期にかけて日本に住み、1959年にアメリカに帰国した日系アメリカ人版画家内間安セイとその妻俊子が、帰米後は森泰、泉茂、高橋力雄などジャパン・ソサエティの招聘で渡米した版画家と親しく交際していたことが判明した。内間夫妻が日米美術交流に果たした役割については今後の研究課題としたい。

### (3) 来日した米国美術関係者

本研究では日米双方向での「人物交流」を研究の目的としていたため、来日したアメリカ人についても調査を行った。その中で明らかとなったのは、まず国務省の派遣でカーネギー財団の美術部長ウォッシュバーンが1957年5月に来日し、約1か月間滞在、5月22日にはアメリカ大使館と日本美術家連盟主催で講演を行ったことである（於ブリヂストン美術館、通訳益田義信）。これは1956年に益田義信がIVPで渡米しウォッシュバーンと面接、カーネギー財団主催ピッツバーグ国際展の日本参加継続の交渉を行った結果、実現したものであり、1958年のピッツバーグ国際現代絵画彫刻展への日本の参加復活へとつながった。

また、1960年7月には国際版画美術協会 International Graphic Arts Society の運営理事テオドール・ガストン Theodore J. Gusten が来日し、日本の版画界の状況を査察した。さらに同年、フィラデルフィアのテンブル大学タイラー美術学校のアーサー・フローリーが来日し、約1年間滞在した（前述）。いずれの費用もロックフェラー財団（ジャパン・ソサエティ）による助成であった。

以上のように、国務省とロックフェラー財団による「人物交流」プログラムは日米双方向によるものへと発展しており、日本美術の国際化の進展に大きく貢献したといえる。

### (4) 日米の美術を繋いだ人物

本研究を遂行する過程で、美術家ではないが1950年代の日米美術交流に貢献した人物が複数浮上した。

占領期日本に駐留していたアメリカ人：たとえば、国務省から招聘された斎藤清は、占領下の日本で交流のあったウィリアム・ハートネット（アメリカ陸軍教育センターで展覧会や講演の企画を担当、1949年にサンフランシスコに戻る）を米国滞在中に訪問、旧交を温めた。その他、占領期日本に滞在したハロルド・ヘンダーソン（CIE 民間情報教育局に所属、ニューヨークに戻ったのちジャパン・ソサエティ会長）、シーボルト夫妻（両親が戦後日本駐在大使）とも滞米中に会っている。すなわち、占領期日本に滞在したアメリカ人とのネットワークが、1950年代の「人物交流」プログラムで活かされたことになる。

山田智三郎：占領期、アメリカ陸軍教育センターで「展覧会および講演」部長としてウィリアム・ハートネットと展覧会の企画などを行い、サロン・ド・ブランタンのアドバイザーを務めたため、在日欧米人と幅広い人脈を築いていた。1954年に国務省に招聘され約1年間滞米、その後国務省から招聘された美術家の選考に深く関わっていたことが判明した。ロックフェラー3世夫妻との関係も深い。1968年には国立西洋美術館の館長職に就いており、戦後日本の美術界を牽引する役割を果たした人物として重要である。

中尾信：戦中期は日本民藝協会で月刊誌『民藝』の編集を担当、戦後1946年から3年ほどCIEで仕事をした。その後、1952年から1976年までの四半世紀にわたって英文美術月報『アート・アラウンド・タウン』を自費で編集・発行した。2017年までの調査で同誌の目次は確認できたものの、すべての号の内容を把握することはできなかった。その後、ご遺族から情報および資料提供を受け、4号分を除くすべての号を入手することができたので、整理し総目録を作成したうえで東京国立近代美術館アートライブラリに寄贈した。『アート・アラウンド・タウン』については現在まで研究者の間でほとんど知られてこなかったが、占領期から1950年代にかけて日本に滞在した欧米の美術関係者によるエッセイが多数掲載されており、貴重な資料である。後世の研究に裨益できるものと考えられる。

### (5) 「1950年代の日米美術交流に関する研究会」の開催

(1)～(4)で行った研究の成果を公開するために、2019年10月5日に戦後美術の研究者を招聘して、1950年代の日米美術交流に焦点を当てた研究会を聖徳大学で開催、話題提供を求めるとともに討議を行って研究の深化を目指した。内容は以下の通りである。

桑原規子「山田智三郎と戦後の日米美術交流」

江口みなみ（横浜美術館学芸員）「長谷川三郎 戦後の創作とネットワークを中心に」

向井晃子（神戸大学大学院国際文化研究推進センター協力研究員）「前衛書の周縁化と書の海外展：森田子龍の貢献と今泉談話の書の『純血』」

味岡千晶（日本美術コンサルタント、在オーストラリア）「米国ライフスタイル誌の Shibui 特集 美意識の需要と供給」

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 28
2. 論文標題 特集解題「戦後日本美術のはじまり」について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代画説	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 26
2. 論文標題 米国国務省による「人物交流」プログラムと1950年代の日米美術交流	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 聖徳大学 言語文化研究所 論叢	6. 最初と最後の頁 171 - 203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 18
2. 論文標題 資料紹介：英文美術月報『アート・アラウンド・タウン』総目録（1952 - 1976）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 55 - 73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 25
2. 論文標題 英文美術月報『アート・アラウンド・タウン』（1952 - 1976）と中尾信 1950年代の活動を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 聖徳大学 言語文化研究所 論叢	6. 最初と最後の頁 143 - 170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chiaki Ajioka	4. 巻 vol.27, no.3
2. 論文標題 Global Mingei : its pre-WW origins	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 TAASA Review	6. 最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 桑原規子
2. 発表標題 山田智三郎と戦後の日米美術交流
3. 学会等名 1950年代の日米美術交流に関する研究会 (科学研究グループ主催)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 味岡千晶
2. 発表標題 米国ライフスタイル誌のShibui特集 美意識の需要と供給
3. 学会等名 1950年代の日米美術交流に関する研究会 (科学研究グループ主催)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桑原規子
2. 発表標題 1950年代における日本人版画家とアメリカ北西派美術家との交流
3. 学会等名 筑波大学芸術学美術史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Noriko Kuwahara
2. 発表標題 The Exchange between Japanese Printmakers and Artists of the Pacific Northwest in the 1950s
3. 学会等名 College Art Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chiaki Ajioka
2. 発表標題 West Coast and Mingei: visits by Leach, Hamada and Yanagi in the early 1950s
3. 学会等名 College Art Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桑原規子
2. 発表標題 斎藤清の芸術 その国際的評価をめぐって
3. 学会等名 福島県立美術館 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Noriko Kuwahara et al	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Jhon and Mable Ringling Museum of Art	5. 総ページ数 -
3. 書名 Saito Kiyoshi : Graphic Awakening	

1. 著者名 桑原規子 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 栃木県立美術館	5. 総ページ数 238
3. 書名 山田耕筰と美術	

1. 著者名 Noriko Kuwahara	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Hotei Publishing	5. 総ページ数 535
3. 書名 Vagues de Renouveau: Estampes japonaises modernes 1900-1960	

1. 著者名 Chiaki Ajioka	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Hotei Publishing	5. 総ページ数 535
3. 書名 Vagues de Renouveau: Estampes japonaises modernes 1900-1960	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	味岡 千晶  (AJIOKA Chiaki)		
研究協力者	光田 由里  (MITSUDA Yuri)		